

## 近代漢語における“把”構文の機能義

## — 『儿女英雄伝』からのアプローチ—

Grammatical Meaning of the ‘ba’ Construction in Modern Chinese:  
A Study of “*Ernü Yingxiong Zhuan*”

藤田 益子

关于现代汉语“把”字句的语法意义上，已有许多既有文献做了各式各样的分析，而这些分析大致上分为处置义与致使义两大类，只不过，关于这两类定义方式，根据不同的研究学者，认识与给予定义的方法却有落差，目前并未获得确切统一的见解；关于语法意义，被认为与“把”字句的一些历史发展过程有关，因此，对于这个问题，本文将着眼于分析“把”字句的历史过程的立场，从语法结构与各句子成分的相关性及其作用的观点出发进行考察；在本文的其中一环节，将用近代北京话的代表材料《儿女英雄传》的使用案例作为分析对象。

## 目 次

1. “把”構文の機能義とは .....	12
2. 『儿女英雄伝』における“把”構文の構造 .....	13
2.1. 処置義 .....	13
2.1.1. 典型的処置義 .....	13
2.1.2. 動作の影響が及ばない処置義 .....	14
2.2. 致使義 .....	15
2.2.1. 典型的致使義 .....	15
2.2.2. 間接的致使義 .....	19
2.3. “把”構文の構造成分と機能義の関係 .....	24
2.3.1. “把”構文の構造成分の役割と種類 .....	24
2.3.2. 処置義となる場合の各成分の役割と性質 .....	25
2.3.3. 致使義となる場合の各成分の役割と性質 .....	25
3. 先行研究による構文形式と機能義に関する分類 .....	27
4. 処置義と致使義の区分 .....	28
5. まとめ .....	29

## 1. “把” 構文の機能義とは

機能義には、現代漢語に関して多くの先行研究があり、様々な分析が述べられているが、大きくは処置義と致使義に大別される。<sup>1</sup>ただ、この二つの定義づけの仕方に関しては、研究者によって認識と定義付けの方法にずれがあるのが現状である。そこでこの問題に対し、“把” 構文の歴史的経緯と構造、更にそれぞれの文成分の関係性と役割という観点から、機能義の問題を考察していく。本稿ではその一段階として近代北京語の代表的な資料である『兒女英雄伝』の用例を分析対象として用いる。ここでは、以下のように各々の定義を設定し、分析を進めることとする。

張・佐藤 (2007,p.87) は、処置義と致使義というこの二つの名称を用いてはいないが、「処置」に対する二種類の用法について、次のように解説する。「動作の主体がある一つのものに対して、一種の主観的な処置や目的を持った行為を行うわけですから、処置文を額面通りに理解すれば、目的性を持っているということになります。しかし、実際には次のような二種の“把” 構文が存在しているのです。a例：“小王把文章写好了。” b例：“他把钱包弄丢了。”<sup>2</sup> a.動作主はその結果が起こることを期待しており、かつ明確な目的性を持って行動して生じた、必然的な結果です。b.動作主はその結果が起こることを期待しているわけではありません。ですから、「目的性」もなければ、処置の意味もありません。bが表しているのは、動作主が意識しないまま、消極的にもたらされた結果だといえます。」

実際に“把” 構文において、目的性を持った動作であるか、つまりある動作行為が実現される際、動作主の意思が有るか無いか、機能義に影響を与えるのは確かである。しかし、『兒女英雄伝』の“把” 構文の全用例を分析した結果、その意思性の有無が確定できない例も多く含まれることが確認された。たとえば、不快な状況が目の前にあり、口がへの字になる場合、どこまで意思が及ぶのか。無意識のうちに、思わず口が曲がってしまう場合と、相手に不満を表明するため意識的に、故意に口を曲げる場合とが考えられる。本来は、このような小説の場合、コンテキストに基づき意識の有無を判断するべきであるが、いずれかはっきりしない用例も多く見られた。<sup>3</sup> (具体例は後述する)

それ故、ここでは、ともすると主観的な判断に陥りがちな意識の有無の問題には敢えて言及せず、結果の起こるプロセスの面から分析を進める。その焦点は、「対象に何かをすることで事が運ばれ、ある状態や結果を得る」のか、あるいは「因果関係があってその成り行きの上で何かが起こり、ある状態や結果が引き起こされる」のかという相違にある。以下では、前者を処置義：「対象を、ある動作行為をすることで、ある状態や結果にすることを表す」、後者を致使義：「因果関係（関係が幾分希薄なものも含まれる）によって、対象が、ある動作行為が生じさせたある状態や結果となることを表す」と定義づけ、この二つの観点から“把” 構文のもつ意義を分類していく。

更に、N (“把” の直後にくる賓語) とV<sub>p</sub> (述語となる動詞句) の関係のほかに、機能義を判断する方法として、“把” と“使”、“使得” の入れ替えの可否も確認のため行う。たとえば、ここでの定義に基づいた解釈による処置義の用例の場合、“把” を「(前で述べられて

いることが原因となって) ある結果を引き起こす」という意味を持つ“使”、“使得”等に入れ替えることは出来ない。これに対して“使”、“使得”は、この「因果関係→結果」という点において、致使義と同様の機能性を持つことから、これらの語と、致使義の“把”とは入れ替えが可能となると考えるためである。

以下、機能義と構文の相関関係を細分化しながら、“把”構文の機能義について分析を進める。

## 2. 『兒女英雄伝』における“把”構文の構造

『兒女英雄伝』における“把”構文は、例外的な動詞の無い用例を除けば、基本的にS+“把”+N+V<sub>p</sub>[V、VC、VN<sub>2</sub>、V得C]の何れかの構造により成り立つ。また、Sは動作主として人物の場合もあるし、前文において説明されたその場面の状況などが相当する場合もあり、省略されることも少なくない。

つまり、“把”構文における必要最低限の構成要素は、“把”と「N(“把”の直後の賓語)」と「V<sub>p</sub>(動詞+補語・“了”・名詞フレーズ等が含まれる)」であり、このNとV<sub>p</sub>の関係によって、“把”構文の表す機能義に違いが生じている。

『兒女英雄伝』に見られる“把”構文は、文の構造と、N、V<sub>p</sub>の関係によって、大きく次の三種類に分類することが出来る。

(A)型：“把”+N<sub>1</sub>+V<sub>p</sub>[V<sub>p</sub>=V+N<sub>2</sub>] (V<sub>p</sub>は必ずN<sub>2</sub>を含む)

N<sub>1</sub>はVの「受事」(受け手)であり、N<sub>1</sub>とN<sub>2</sub>の二つの名詞性成分を持つ。

(B)型：“把”+N+V<sub>p</sub>[V<sub>p</sub>=V、VC、V得C]

NはVの「受事」(受け手)であり、一つの名詞性成分Nを持つ。

(C)型：“把”+N+V<sub>p</sub>[V<sub>p</sub>=V、VC、VN<sub>2</sub>、V得C]

NはVの「施事」(動作主) 或いは「当事」(当事者) であり、“把”を削除しても、「施事主語句」、「当事主語句」として文が成り立つ。

### 2.1. 処置義

ここでは、処置義を「対象を、ある動作行為をすることで、ある状態や結果にすることを表す」という先の定義に基づき、具体例を挙げ分析を進める。『兒女英雄伝』に見られる処置義は、動詞の性質によって二つのタイプに分類することができる。

#### 2.1.1. 典型的処置義

典型的処置義の意味は、たとえば「S+“把”+VC」という構文に基づいて示すなら、「SがNに対してVという動作行為を行う(それにより何らかの影響がNに対して及び、Cという状態が発生する)」というものである。そして、NはVの動作行為が及ぶ客体を表す「対象目的語(object of action)」である。

この場合、Vは「他動詞」であり、Nは「受事」(受け手)であり、かつVはNに対する

処置である。つまり、これはNの性質を受事と決定付けるものであり、文型と機能義の関係を整理すると、“把”の後の賓語が受事である必要上、文型(A)型と(B)型は処置義を表すが、(C)型は処置義にはなれないということになる。

例：“我只打量你們把我當啞吧賣了呢！”(7)

(「私はあるあなたが[私を口のきけない者として]私に口を挟ませないのかと思ったよ。)(「當啞吧賣了」は、口もきかせてもらえず黙らせられるという意味で用いられている。)

例：“自然該把這項進奉了父母，作這樁正務纔是。”(33)

(「もちろんこのお金をご両親様に献上して、この借金の請け出しと致します。)

### 2.1.2. 動作の影響が及ばない処置義

Vが“聽”、“說”、“想”、“看”のような動詞の場合は、「他動詞」であっても、VはNに対し何か処置を行っているわけではない。そのため、典型的処置とは呼ぶことが出来ないが、「SがNをVする」という意味の動作行為と目的語の関連性が成立する点においては処置の基本義に一致している。ただし、この場合、Vの動作行為による影響が、Nを対象として及ぶものではなく、NはVの動作行為が実現する内容や結果を表す「結果目的語 (object of result, effective object)」<sup>4</sup>である。要するにVという動作行為の事の顛末が、Cという状態や様態によって存在しているのがNなのである。

このような処置義の用例には、次のようなものがある。

すぐ下の三例には状語として“都”が動詞の前にあるため、S+V+N形式の主述文に書き換えることはできないものの、VとNの間には、処置としての意味上の支配関係がある。

例：“你這裡頭沒提上我們姑奶奶。我往往瞧見人家那碑上，把一家子都寫在後頭；再你還得把你方纔給倆小子起的那倆名字也給寫上。”(39)

(「あなたの文章には、わしの娘のことが全然書いていないのだが、他の人の碑には、一家の者の名を下にずらりと書いてあるのを良く見かけるのですがね。それからついでにあなたが名前を付けてくれた子供たちのことも書いておいてもらいたいのですよ。)

例：安太太未曾合老爺提這件事，本就捏着一把汗兒，心裡却也把老爺甚麼樣兒的左縫眼兒的話都想到了，却斷沒想到老爺會往這麼一左。這一左，倒誤打誤撞的把件事左成了，一時喜出望外。(40)

(奥様は学海様にこれを言いだすまでは、手に汗を握る思いで、心中でおよそ学海様が言い出しそうなつむじ曲がりな言葉を全て予想していたのですが、まさか学海様のつむじが曲がりに曲がって、こうも見当違いなところまで、うまくまとまろうとは考えてもおりませんでしたので、望外の喜びというところでした。)

例：太太幾乎要把兒子這幾天的吃喝拉撒睡都問到了。(35)

(奥様はこの幾日かの飲み食いから、ご不浄のこと、寝られたかどうか、ということまで一つ残らず聞き出そうとしました。)

例：“如今他把我的行藏說的來如親眼見的一般，就連這銀子的數目他都曉得，我還瞞些甚麼來？”(5)

(「今、彼女は私のことを見てきたかのように言っている。銀子の量だって彼女は皆知っているのではないか、私はまだこれ以上何をごまかせるというのだろうか?」)

## 2.2. 致使義<sup>5</sup>

致使義について薛(1994,pp.46-47)は、文法構造：「A把B+C」において、「Aの關係に因つて、BがCの描写する状態に変わる。(AはどのようにBを処置したかではない)」(原文：“由於A的關係，B變成C描述的状态”)としている。もし、このような観点から本稿における構造や定義に則り致使義を考えるならば、その主な意義は、「(ある要因が、)Nがある状態になるのをVという動作行為で引き起こす」ものと理解される。<sup>6</sup>以下の項目では、この理解を基点に致使義の解析を進める。

### 2.2.1. 典型的致使義

典型的致使義を表す“把”構文は、ある条件の下で複数の構造に現れる。更に、構造上のNの性質によって細分化される。

#### 2.2.1.1. 構文(C)型：“把”+N+V<sub>p</sub>[V、VC、VN<sub>2</sub>、V得C]

この(C)型構文において、NがVの「施事、当事」(動作主、当事者)であり、たとえ“把”を削除した場合でも、N+V<sub>p</sub>という「施事主語句」(動作主主語句)、または「当事主語句」(当事者主語句)として文が成立する、この条件にかなう文は致使義となる。

ここでいう致使義とは「NがVという動作行為を行うこととなる(VCの場合はCという状態を伴う)」というもので、この(C)型構文においては、「Nに影響(刺激、外圧)を与える力を持ったものが、NがV<sub>p</sub>する行為(状態)を引き起こす」と解釈される。

(C)型のNには、Vの「動作主と当事者」という二種類の性質が存在する。以下、Nの性質に基づき分類を進める。

#### (1)Nが施事(動作主)である用例

『兒女英雄伝』には、以下の①のように現代漢語に共通する用法だけでなく、②のように現代漢語では“把”構文を用いずに表される用例も含まれている。

#### ①現代漢語においても、“把”構文で表現される用例

例：住了今日這家請讌會，便是明日那個請閑游，把個公子應酬得沒些空閑。(38)

(今日はこの家の宴会、明日は誰その遊会といった体たらくで、[若様は]付き合いで体の空く間も無いほどです。)

例：把個鄧九公疼的，望着他眼睛樂的沒縫兒，口笑的合不攏來。(15)

(鄧九公は可愛くて、彼女をみながら目細め、口元は緩み放しになっています。)

例：那跑堂兒的答應了一聲，蹶身就往外取壺去了，把個公子就同泥塑一般塑在那裡。(4)

(小僧は「はい」と答えると、引き返して外へ湯をとりに行ってしまったので、若様ときたら泥人形のようにそこへ固まっていました。)

②現代漢語では、“把”ではなく“讓”を用いる方が可能（またはその方が自然）な用例これらは、受動の意味を持つものである。

例：至於安公子，空吧嗒了幾個月的嘴，今日之下，把隻煮熟的鴨子飛了，又叫張金鳳怎的對他的玉郎？(25)

(若様に至っては、なおさらのこと、何ヶ月も待ち望んでいて、今日になって、食べるばかりに煮えたアヒルに飛んで逃げられてしまうことになるのです。金鳳にしてもどうして、だんな様に合わせる顔があるでしょうか?)

例：如今又加上這等幾句話，把自己相處了一年多的一個同衾共枕的人，也不知“是幾時孟光接了梁鴻案”，這麼兩天兒的工夫，會偷偷兒的爬到人家那頭兒去了！(30)

([若様は]今このような言葉を更に付け加えられて、この一年あまり仲睦まじく暮らしてきた者に、「いつの間にか孟光[妻]が梁鴻[夫]からお膳を受け取るように夫婦の立場が逆転した」とも知らず、こうもあっけなく、寝返られようとは思いませんでした。)

ここに挙げたような“把”構文には、前文に前提として外因となる場面の状況が描写されている。更に、構文上の主語Sは省略されていることが多い。「この外因のせいで、NがVpという動作行為を行い、ある状態をひき起こす」という意味を持つ。

また、外因を起点として考える場合は、「外因が、NをVpするという状況に陥らせる」というNにとっての受身的な解釈も可能である。

このような文は、現代漢語では、“把”を“讓”に書き換えることが可能であり、特に30代以下の若いインフォーマントでは後者の方が自然な表現となるとしている。(“被”は、被害などの因果関係が明らかになっている必要があるため、この例文での書き換えについては不自然となり、“讓”の方がより自然な表現となる。)

このように、現代漢語において、“把”ではなく“讓”や“被”を用いることが可能（またはその方が自然）となる類の用例には、次のような共通点が存在する。それは、「原因があり、その影響を受けてある事態を引き起こす動作主と動作があり、それによって生じた事

近代漢語における“把”構文の機能義  
—『兒女英雄伝』からのアプローチ—

態を被る受け手が存在する。つまり、『原因—動作主—動作—受け手』の相互関係が明確な文である」という点である。

張・佐藤(2007,pp.97-98)には、現代漢語における“把”構文と“被”構文の違いについて、次のような説明がなされている。「意味の点から言いますと、“把”構文、“被”構文ともに、ある主体がある力によって変化をきたしたということを表します。しかし、“被”構文の『有る力』とは、『外的力』であるのに対し、“把”構文の『ある力』というのは、『内的力』ということになります。(中略)つまり、もし“把”と“被”構文が表す重点が動作後の変化にあるとするならば、“把”構文中のこのような変化が形成された原動力は主体にあるのに対し、“被”構文のこのような変化の原動力は外的力にあるということです。」

これに対し、『兒女英雄伝』における“把”構文では、張・佐藤(2007)が言う「内的力」と「外的力」に対する区別が、現代漢語の用法よりも曖昧で、「内的力によって変化をきたす“把”構文」に、「外的力によって変化をきたす“被”([2.2.1.2.(1)]・[2.2.2.1.(3)②]参照)や“讓”等の受動構文」が、包括されていたということになる。

これに対し、対象に対して動作行為を促すような使役の意味を持つものは、現代漢語においても“把”を用いる。

例：恰好安老爺吃了一個嘎嘎棗兒皮子塞住牙縫兒，拿了根牙籤兒在剔來剔去，正剔不出來，一時把安太太婆媳笑個不住。(34)

(ちょうど学海様が棗を食べたのですが、その棗の皮が歯の隙間に挟まってしまい、爪楊枝でそこを何度もほじくったのですが、掻き出すことが出来ず、それで暫く奥様と嫁達は笑いが止まりませんでした。)

この文の原義は、「そのことが奥様と嫁達を笑わせて止まらなくさせた」ということである。この例文の場合、“使”や“讓”に書き換えると現代漢語においても使役義が強くなってしまい却って不自然な文となる。そのため、このような対象に対して動作行為を促すような弱い使役義を表す場合は、現代漢語でも“把”構文を用いる。たとえば、“把安太太笑得停不住。”のような表現をする。

## (2)Nが当事(当事者)である用例

この類は、現代漢語においても“把”構文で表現される。当事者は、動作主の身体器官である例が多い。当事者の場合、たとえば人間を動作主とし、その器官を動作の受け手と見ることも可能であり、また、人間と同格のものとしてその器官自体が、動作行為を支配する動作主であるとも考えることも可能である。コンテキストにもよるが、ここでは、特別な制約が無い限り、実際の動作行為を行うものとして、後者の考え方である「当事者は動作主(施事)に準ずるもの」として分類し、この致使義の項目に用例を挙げる。(この二種類の解釈については、後の『施事』と『受事』の両方の解釈が可能な場合([2.2.2.1.])で更に詳しく述べるものとする。)

例：他在那裡把個臉兒望着榻子看詩，他那臉上的神氣連張金鳳還看不見，他心裡的事情我說書的怎麼猜的着？(29)

(彼女はそこで顔は建物の仕切りの方に向けて詩を読みましたので、彼女の顔の表情は金鳳にも見えはしませんでした。彼女の心の中をこの講談師の私がどうして言い当てることができます。)

例：張金鳳雙關緊抱，把臉靠住了那姑娘的腿，賴住不動，說：“要姐姐說了不去，我纔起來。”(9)

(張金鳳は腕に力を入れ、顔は十三妹の足にぴたりと押し付けて、てこでも動こうとせず、「お姉さまが帰らないと言って下さらなければ立ちません。」と言いました。)

例：“你只把身子賴在這兩扇門上，大約今日是不放心這兩扇門。”(28)

(「ドアの前で居座るとは、よっぽど今日はそのドアが心配なのですね。」)

## 2.2.1.2. 構文(A)型：“把”+N1+V<sub>p</sub> (V<sub>p</sub>は必ずN2を含む) と(B)型：“把”+N+V<sub>p</sub>[V、V C、V得C]

この二つの文型も、ある一定条件の下で「致使義」となりうる。この条件とは、(A)型と(B)型の“把”+N1+V<sub>p</sub> (V<sub>p</sub>は必ずN2を含む)、または“把”+N+V<sub>p</sub>[V、V C、N得C]の形式において、N1はVの「受事」(受け手)であり、これらの構文から“把”を削除した後も、「受事主語句」となり、文が成立する場合である。

意味は、「NまたはN1に影響(刺激、外圧)を与える力を持ったものが、NまたはN1に対して、Vという行為をなし、その結果ある状態を引き起こす」というものである。

### (1)N1が動作の受事(受け手)である用例

(A)型：“把”+N1+V<sub>p</sub> (V<sub>p</sub>は必ずN2を含む)のような二重賓語を取る用例のN1は、基本的に受事であり、その中で致使義に解することの出来る例はごく一部に限られている。それは、次のように「『通常、故意に行う動作行為とは成り得ない、主体性・動作性のない動詞』+“在”+場所」の用例である。たとえば、“忘”、“落”などがこの動詞に当たる。

例：却說安公子經了這一番喧鬧，又聽了這半日長談，早把那黃布包袱忘在九霄雲外。(9)

(若様はこの騒ぎに加えて、この半日の長きに亘り話を聞いたせいで、あの黄色い包みのことをすっかり忘れていました。)

現代漢語では“被”を用いても表現され、“那黄布包袱被忘在九霄云外”となる。

例：“我一時大意，就隨着大家出來，不想把那塊硯台落在那廟裡，這便如何是好？”(10)

(「私はうかつにも、そのまま皆さんについて出てきてしまったせいで、硯を寺に忘れて来てしまったのです、どうしたら良いでしょうか?」)

現代漢語では“被”を用いても表現され、“那塊硯台被落在那廟裡”となる。

近代漢語における“把”構文の機能義  
— 『兒女英雄伝』からのアプローチ—

(2)Nが動作の行われる限定された場所となる用例

例：“西邊的八桌便是九公合褚姑奶奶給你辦的救贖。你瞧，把個小院子兒給擺滿了！”(27)  
(「西側の八台のテーブルは九公と褚一官の女房があなたに送ってくださった嫁入り道具ですよ。なんとまあ、あの中庭がお祝いの品が並んでいっぱいになってしまっていてよ！」)

例：張太太是兩隻手都佔着呢，只得把攥絹子的那隻手伸了兩個指頭，拉住了安太太的手，一面哆嗦着，口裡說：“好哇！太太！”(12)  
(張家の奥さんは両手がふさがっていたもので、仕方なしにハンカチを握った手の二本の指だけ伸ばして奥様の手を握りしめ、震えながら、言いました。「ご機嫌よろしゅう！奥様！」)

(3)コンテキストと内包される語義によって判断する必要のある用例

次のような文は、上下の文脈から見て、明らかに意図的に行った行為ではなく、無作為の動作行為の結果として生じた状態を描写していることから、致使義と分類することが出来る。

例：那和尚一面送酒，公子一面用手謙讓，說：“別斟了，我是天性不飲，抵死不敢從命。”一時匆忙，手裡不曾接住，一失手，連盅子帶酒掉在地下，把盅子砸了個粉碎，潑了一地酒。不料這酒潑在地下，忽然間唵的一聲，冒上一股火來。(5)  
(和尚は酒を勧めましたが、若様は手で辞退し、「結構です。生まれつき飲めないものですから、どうあってもこればかりは御勘弁ください。」と言いました。とっさに慌てていたもので、杯を受け取り損ねて、杯は壊れて粉々になってしまい、お酒が撒かれてしまいました。はからずもこの酒が地面に撒かれると、突然、ポツという音を立てて、一筋の炎が立ち上がりました。)

例：大家聽了，連忙望外一看，果見公子忙兜兜的從二門外跑進來，忙着跑的把枝翎子也甩掉了。(40)  
(一同がその声を聞き、慌てて外を見れば、若様が慌てふためいて中門から走って入って来たところでしたが、慌てて走っているの[帽子に刺した]孔雀の羽が振り回されて落ちました。)

### 2.2.2. 間接的致使義

これに相当するのは(S)+“把”+N+V(+“得”)+Cという構文において、NとVの間には施受関係がなく、動詞句のVとCの動作主が異なる用法である。VはS(主語)の動作であり、CがNの状態を表す。意味は、「(S)がVという行為をすることによって、NにCという状態を生じさせる(“由於S做了V，使得N生產了C的狀態”）」というものである。この場合の必須条件として、構文が(S)+“把”+N+V(+“得”)+Cという構造である必要がある。結果を表す補語Cは必須の文成分であり、もしCが無ければ、Nに関して生じた状態を表す

ことが出来なくなる。

例：他講了半日，通共不曾把好端端的安老爺爲甚麼要扮作尹先生這句話說明白。索性把個姑娘也鬧得迷了攢兒了，瞅瞅這個，看看那個，也不知聽那句好，問那句好。”(19)

([鄧九公は]長々喋ったわりには、学海様が何故尹先生に扮する必要があったのかという肝心な話を一つも説明しませんでした。それで、とうとうそんな娘は、このように九公に騒がれて、訳が分からなくなって困ってしまい、こっちを見たり、あっちを見たり、誰の話を聞いてどの話を尋ねればよいものやら分からなくなってしまいました。)

### 2.2.2.1. 致使義と処置義の可能性のあるもの

Nに「施事」と「受事」の両方の解釈が可能な場合がある。

#### (1)Vが感情を表す動詞

構文：“把”+N+V(+“得”)+Cにおいて、二つの解釈が成り立つ場合がある。それは、Vが“急”、“嚇”、“樂”、“慌”、“慚”、“氣”、“羞”等の人の精神や心理状態を描写する動詞である場合である。たとえば、Nを施事、Vを“嚇”(驚く・驚かされる)と捉え、非使役義(～にNが驚く・驚かされる)にとることも可能であり、また一方で、Nは受事、Vは他動詞“嚇”(驚かせる)と捉え、使役義(～がNを驚かせる)にとることも可能である。ただし多くの場合、前者の方に解釈されることが多いようである。

同様に、次の用例中に下線を引いた部分は次の①、②の二種類に解釈が可能である。

①気持ちが静まる・静められる。非使役義⇒「Nは施事(動作主)」致使義

②気持ちを静めさせる。使役義⇒「Nは受事(受け手)」処置義

#### <氣>

例：“華忠聽了老爺這段話，纔把他那股渾氣消下去了”。(39)

(華忠は学海様の話を聞くと、〔①やっとな腹立ちは静まりました。／②やっとな腹立ちを静めさせました。〕)

#### <嚇>

例：那公子見他回來，說道：“姑娘，你可回來了！方纔你走後，險些兒不曾把我嚇死？”(6)

(若様は娘が帰ってきたのを見ると、「お嬢さん、お帰りくださいましたか！さっきあなたが行かれてしまわれた後で、すんでのところ、〔①私は驚いて死にそうになりましたよ。／②私を驚かせるので死にそうになりましたよ。〕」と言いました。)

#### <慚>

例：這兩個驢夫再不說他間下一頭驢子，他還是不住的左支脚錢，右討酒錢，把個老頭子嘔的，嚷一陣，鬧一陣，一路不曾有一天的清淨。(3)

(この二人の馬方は一頭のロバは使いもしないのにそれには触れもせず、ひっきりな

近代漢語における“把”構文の機能義  
— 『兒女英雄伝』からのアプローチ—

しに駄賃を前払いしてくれたの、酒代が欲しいだのと、〔①年寄り腹をたてて、／  
②年寄りに腹をたてさせて、〕その度にどなったり、口論したり、道すがら何事も無  
く終わるといふ日は1日もありませんでした。)

<急>

例：毎日價醫不離門，藥不離口，把個安太太急得燒子時香，吃白齋，求籤許愿，鬧得寢食不安。(1)

(来る日も来る日も、医者から離れることができず、薬を欠かすことができず、〔①  
それでなんとあの安家の奥様が焦ってしまい、／②それがなんとあの安家の奥様を焦  
らせて、〕線香を焚いて神様にお祈りをしたり、生臭を断ったり、おみくじをひいて  
願掛けをしたり、寝るのも食べるのも落ち着かない有様でした。)

例：不想一連走了兩站，那趕露兒也沒趕來。把個公子急的不住的問：“嬈嬈爹，他不來可  
怎麼好呢？”(3)

(あれから二晩泊まりを重ねましたが、一向に趕露兒は追いついてきません。〔①そ  
れで若様は心配でやきもきして／②それが若様を心配でやきもきさせて〕「爺や、あ  
れが来なかったらどうしよう？」としきりと尋ねるのでした。)

<樂>

例：有的獻個壽意的，有的道句壽詞的，無非賀壽拜壽，祝壽翁的百年長壽，把個鄧九公樂的，  
張罗了這個又應酬那個。(39)

(ある者は寿意を献じ、ある者は寿詞を述べました。これは誕生祝いにほかならず、  
長生きの老人の百歳の長寿を祝うものですが、〔①この事に鄧九公は大いに喜んで、  
／②この事が鄧九公を大喜びさせて、〕こちらを接待したりあちらを接客したりして  
います。)

その他の用例については、例文のみ挙げる。

<忙>

例：緊接着就有内城各家親友看了榜先遣人來道喜，把位安太太忙得頭臉也不曾好生梳洗得。(1)

<慌>

例：把個舅太太慌的，拉着他的手說道：“好孩子，好外外，你別着急，別委屈！咱們去，  
咱們去！”(3)

<羞>

例：又見那公子跪在地下，把他羞得面起紅雲，抬身往裡間就走。(8)

(2)Nが人体器官であり、Vはその動きを表す動詞

“把”構文の主語が、Nという器官を持つ人物である場合、Nを「当事」(当事者)と見

ることも「受事」(受け手)と見ることも可能である。

たとえば、①Nを「当事」(当事者)と見る。

例：“把頭碰的山響”→“頭碰”(頭がぶつかる)

“把嘴撇”→“嘴撇”(口がへの字になる)

「当事」に解釈した場合は、「施事」と同様に動作主の一つとみなす。そのため、この場合は、致使義と考えられる。

一方、②Nを「受事」(受け手)と見る。

例：“把頭碰的山響”→“(人)碰頭”(頭をぶつける)

“把嘴撇”→“(人)撇嘴”(口をへの字にする)

このように「受事」と解釈した場合は、処置義と考えられ、意識的な動作として読み取ることが出来る。

例：“你說，這娘兒四位這一分手，大爺、大奶奶心裡該怎麼難受！太太心裡該怎麼難受！叫僮們這作奴才的旁邊瞅着肉療不肉療！再者，二位大奶奶素來帶我的恩典，我們娘兒們怎麼離得開！”說着，又把嘴撇的瓢兒似的。(40)

(「こんな風に四人の方々が別れ別れにされたら、若様や若奥様達がどんなに辛い思いをされるか、奥様がどんなに悲しまれるか、あなたにも分かるでしょ！私たち使用人だって傍で見ていて辛くて仕方がないじゃないの！その上、2人の若奥様はかねがね私に恩情をかけてくださっていて、私たち皆どうして離れ離れになることが出来るというの！」という、〔①また口が瓢筆のように歪んでしまいました。／②また口を瓢筆のように歪めさせました。〕)

例：公子道：“哟，哟！这就無怪其然你把個小臉兒繃的單皮鼓也似的了，原來爲這樁事！我勸你快快不必動這閑氣，這是夢！”(23)

(「おやおや！〔①そんなことで顔が太鼓みたいにパンパンになっていたのかい！／②そんなことで顔を太鼓みたいにパンパンにさせていたのかい！〕そんなに怒ることはないじゃないか、たかが夢のことで！」と若様が言いました。)

例：此外再沒別的散碎話，還帶管低着雙眼皮兒，把個臉兒繃得連些裂紋兒也沒有。(38)

(それ以外何も話さず、目を伏せて〔①顔は皺ひとつ無いくらいにピンと張って②顔を皺ひとつ無いくらいピンと張らせて〕こわばっています。)

例：那女子回過頭來，見東牆邊那五個死了三個，兩個扎挣起來，在那裡把頭碰的山响，口中不住討饒。(6)

(女が振り返ると東の塀の隅の五人のうち三人はもう死んでいましたが、二人は起き直ると、その場で〔①額は地面にぶち当ってゴンゴンと鳴り響いており、／②額を地面に打ち付させてゴンゴンと鳴り響いており、〕口ではひっきりなしに命乞いをして

います。)

(3) “把”構文全体に判断が委ねられるもの

Vが他動詞の“把”構文は、多くはNに対する処置義と考えられる。しかし一部、Vが他動詞であっても、“N+V+C”の受事主語句として文が成立し、“V+C”は状況に対する陳述となる致使義と同様の性質を持った文がある。このような文の機能義は、“把”構文全体に判断が委ねられることになる。

『兒女英雄伝』におけるこのような用法には、用例によって動詞の動作性に強弱が見られ、動作性の強いものは致使義、動作性の弱いものは処置義とみなされる。

① Vの動作性が弱い用例

以下の用例のようなVの動作性が弱い“把”構文から、“把”を取り受事主語句として見た場合、受け手と動作の間には、対象に動作行為が及び対象物自体に変化が生じるような明確で直接的な受動関係が弱いため、たとえばすぐ下にある“戴”の用例などは、“被V”等の形へは言い換えができない。これらのVは主に状態を表現している。このような、動作性の弱い動詞の“把”構文は処置義と見なされる。

例：老爺看那道士時，只見他穿一件藍布道袍，戴一頂櫻道笠兒。那時正是日色西照，他把那笠兒戴得齊眉，遮了太陽，臉上却又照戲上小丑一般，抹着個三花臉兒，還帶着一圈兒狗蠅鬍子。(38)

(学海様がその道士を見ますと、藍色の木綿の着物を着て、<sup>しゅろ</sup>棕櫚の笠をかぶっております。おりしも西日が差し込み、彼は笠を眉のところまで下ろして、日差しを避けておりましたが、顔は芝居の道化のように、鼻を中心に丸く白粉を塗り、更に役者の付けるまばらな付髭をつけております。)

例：張姑娘是疊着精神要張羅這個姐姐，兩隻小脚兒哆哆哆的，帶了一班嬾嬾僕婦使婢，把鋪設貼落收拾得都合自己屋裡一樣。(32)

(金鳳は大張り切りで玉鳳を手伝い、小さな足でコトコトと動きまわり、女中たちを指図して、壁に飾られた飾り物などを整えて自分の部屋とすっかり同様にしつらえました。)

例：“不想我把事情弄妥了，趕回店來，你倒躲了我。”(8)

(「私が事をちゃんと片付けて手配りしてあげたのに、宿へ戻ると、あなたが逃げてしまっているとは思いませんでした。)」)

例：却說安公子見金、玉姊妹已經把家裡整理得大有眉目，自己的功名却纔走得一半途程，歇了兩日，想到明年會試，由不得不急着用功。(36)

(若様は二人の妻が家のことを大方片を付けたのを見ると、自分の科挙の試験がよう

やく半分終わったばかりなのを思い、二日休んだだけで、来年の会試のことを考えて、勉強をせずにはいられなくなりました。)

## ②Vの動作性が強い用例

動作性が強くいずれも“被V”の形に言い換えが可能な用例である。致使義と見ることが出来る。

例：賣水烟的把那水烟袋吹的忒兒嘍嘍的山响。(4)

(タバコ屋に水タバコは吹き立てられてゴロゴロと大きな音がしていました。)

例：上去向那石頭楞子上噹的就是一脚，那石頭風絲兒也沒動。李四“噯哟”了一聲，先把腿蹲了。(4)

(石の角に向かってポンと一蹴りしたが、石はびくともしません。李四は「わっ」と一声、足がしびれてしまいました。)

例：無奈他此時又盼事成，又怕事不成，把害怕、爲難、暢快、歡喜，一股腦子攪成一團，一時抓不着話頭兒，又挨磨一會子，纔訕不搭的說了三個字，說道是：“長的好。”(12)

(ただこのときは話が壊れないかとそればかり気がかりで、恐いやら、辛いやら、嬉しいやら、楽しいやらが、頭でごちゃごちゃになって、とっさに何と言ったらよいかわからず、暫くもじもじした末、やっとのことで三文字口に出しました。「美人です。)

## 2.3.“把”構文の構造成分と機能義の関係

これまで述べてきた『儿女英雄伝』における“把”構文の構造成分とその役割を整理すると、次のようにまとめられる。

### 2.3.1.“把”構文の構造成分の役割と種類

#### 2.3.3.1.Sの役割

S(主題あるいは主語)には、“有意識”の場合と“無意識”の場合、二種類がある。また、前後関係から推測が可能な場合は、Sは省略され、無主語の“把”構文も多く見られる。

#### 2.3.3.2.Nの役割

Nの役割には、四種類考えられる。

(1)NはVの「受事」

(2)NはVの「施事」

(3)NはVの「受事」または「施事」

(例：Vが感情を表す動詞の場合)

(4)NはVの「受事」でも「施事」でもない

(例：Nが動作の場所、またはNが補語にとっての施事の場合)

### 2.3.3.3.Vの役割

動詞の動作行為には、自動・他動（非使役義・使役義）の別が見られる。

### 2.3.2. 処置義となる場合の各成分の役割と性質

#### 2.3.2.1.Nの種類

処置義となる場合、NはVの「受事」である。

#### 2.3.2.2.Vの種類

処置義となる場合、Vの性質には次のようなものが該当する。

##### (1)他動詞でNに何らかの影響を及ぼすもの

例：“依奴才糊塗主意，求老爺把他們送了官，奴才出去作個抱告，合他質對去。”(31)

（「私どもの愚案ですが、お殿様には泥棒を役所に引き渡して頂き、私どもが役所に報告して、彼らを面と向かって法廷で対質いたします。」）

##### (2)他動詞でNに直接的な影響を及ぼさないもの

“聽”、“說”、“想”、“看”などの動詞。

例：那兩個賊聽了這話，只急得嘴裡把“老爺子”叫得如流水<sup>7</sup>，說：“情願照數賠瓦，只求免得這場出醜！”(32)

（二人の賊はこれを聞いて、慌てて『だんな様』と叫ぶこと流水の如くでございました。そして、『おっしゃる通り[数通りに]瓦を買いに行くのは構いませんが、この格好で買いに行くのだけはご勘弁を！』と頼みました。）

### 2.3.3. 致使義となる場合の各成分の役割と性質

#### 2.3.3.1.Nの種類

施事あるいは「当事」、「受事」、更に何れでもない場合がある。

また、“把”の代わりに“使”、“使得”との入れ替えが可能である。

#### 2.3.3.2.Vpの種類

##### (1)動詞の性質によって致使義が表現されるもの

例：“這位姑娘，一個女孩兒人家，既把身子落在這等地方，自然要商量個長法兒。”(7)

（「お嬢さん、あなたも娘でありながら、既に身はこのような所へ落ちてしまったのだから、むろん将来のことを長い目で見て考えなくては。」）

##### (2)述部が特殊な動補構造を形成しているもの

絶対条件ではないが補語を伴う例が多く、特殊な動補構造としては、次のようなものが含まれる。

① “把”の賓語は動詞の「受事」（受け手）でも「施事」（動作主）でもなく、補語の「当事」

(当事者) であるもの

「(Nは) VすることによってCとなる。または、Vという動作行為によってNにCの状況を発生させる」と解釈される。

例：“你說怪不怪，把跨骨裁青了巴掌大的一片，他這胎氣竟會任怎麼個兒沒怎麼個兒！”(39)  
（「不思議に思われませんか、[ひっくり返って]太もも[股関節の外側]に手のひら<sup>だい</sup>大のあざができて青くなったのですが、意外にもお腹の子供は大したことにならずに済んだのですよ！」）

②動補構造のVがNに直接関係しないもの

例：果然把個姑娘說急了，只見他拉住褚大娘子說道：(26)

（玉鳳はこう言われて焦ってしまい、褚一官の女房の袖を引っ張りながらこう言いました。）

この場合は、動詞に自動詞、他動詞いずれの可能性もある

a. 自動詞の場合

例：他婆媳一想，這話果然行不去，一爲難，重新又哭起來。這一哭，可把舅太太哭急了，說：

“姑太太，你們娘兒三個這哭的可實在揉人的腸子！”(40)

（奥様と嫁たちはちょっと考えて、この話はなるほどまずいと気づき、また辛くなって、改めて泣き始めました。佟婦人は彼女たちが泣くので困ってしまい「ちょっと、あなたたちに泣かれると本当に辛くなるから！」と言いました。）

b. 他動詞の場合

例：問來問去，把個鄧九公問煩了，說道：(17)

（二人は問いかけ合いをしていますが、鄧九公はその二人のやりとりにいらいらしてきて、こう言いました。）

(3)動詞が致使の意義素を内包するもの

更に一つの動詞の中に二つの意義素が内包されることが要因となって、非自主動詞の場合は致使、自主動詞の場合は処置となるものがある。

たとえば、次の“砸”には、「(故意に)ぶつける、当てる」と、「(不用意に落として)壊す」の両方の解釈が成り立つ。文脈から見て、この場合は、後者の意味で使われており、“打碎”と同じ意味に理解されるため、“砸”は結果としての致使の意義素を内包する動詞と考えられる。

例：那和尚一面送酒，公子一面用手謙讓，說：“別斟了，我是天性不飲，抵死不敢從命。”

一時匆忙，手裡不曾接住，一失手，連盅子帶酒掉在地下，把盅子砸了個粉碎，潑了一地酒。不料這酒潑在地下，忽然間唵的一聲，冒上一股火來。(5)

（和尚は酒を勧めましたが、若様は手で辞退し、「結構です。生まれつき飲めないものですから、御勘弁ください。」と言いました。とっさに、慌てていたもので、杯を

受け取り損ねて、杯は壊れて粉々になってしまい、お酒が撒かれてしまいました。はからずも、この酒が地面に撒かれると突然ポツという音を立てて、一筋の炎が立ち上りました。)

#### (4)動詞の賓語への支配関係がなく、文の内容によって決定付けられるもの

次の用例における“可把我飛暈了”の“飛”は同音の“非”の文字の置き換えであり、“可把我‘非’暈了”ということである。この場合は致使義と考えられる。

例：安公子急的搖頭道：“不曾，不曾，我並不曾定下親事。”十三妹笑道：“既不曾定親，問着你，你這也‘飛也’那也‘飛也’，儘着飛來飛去，可把我飛暈了。倒是你自己說罷！”(9)

(若様は慌てて首を振って「まだです。まだです。まだ決まった結婚相手などおりません。」という、十三妹は笑って「まだ決まっていないなら、聞くけど、あれもだめ、これもだめ、だめだめ尽くし、そのせいで私は分からなくなってしまうわ。自分で説明して頂戴よ！」と言いました。)

### 3. 先行研究による構文形式と機能義に関する分類

“把”構文は、近年、現代漢語のみならず、歴史的変化に関する研究も盛んに行われており、その発生の起源や分類方法、変遷の経緯の分析等、見解が分かれるところである。

それに伴う機能義についても、処置義や致使義等、数種類の分類方法があり、更にそれを広義と狭義に分類する説など、研究者によって考え方がまちまちなのが現状である。<sup>8</sup>ただ、多くは“把”構文の機能義には、歴史的ないくつかの発展のプロセスが関係していると見ており、いわゆる広義の処置式といわれるものは、蔣(2005,p.229)に、「連動式から発展したもので、祝敏徹、王力、P.A.Bennett、貝羅貝等が既に明らかにしており、連動式から処置への発展は、“取、持、將、把、捉”構文の変遷と同様に、第一の動詞が語法化し、動詞から処置のマーカーになったと考えられている」とまとめられている。

致使義の発展プロセスについては、蔣(2005,p.230-231)は、「致使義の形成された経緯は、一般の処置式と同じように“將”や“把”を用いて賓語を前に出したことによって成り立つものと見られる。ただ、これらの句の述語が使役義の動詞または形容詞、あるいは、使役義の動結式であり、その賓語が構文の役割上、述語の動作主あるいは当事者であるため、賓語が述語の前に置かれたとき、施事(当事)主語句となる。しかし、この解釈がすべての致使義の処置式に当てはまるわけではない。(中略)一部の致使義の処置式には、工具句から変化してきたものがあるからである。」としている。ほかにも次に挙げたような代表的な構造の発展に関する研究があるが、分類方法が一致していない上、類別の表現もまちまちである。最後に主な先行研究と本稿における分類を大まかに対照しておく(表1参照)。

主な先行研究の分類との対照（表1）

呉福祥 <sup>9</sup>	梅祖麟 <sup>10</sup>	薛鳳生	本稿の分類
(一) 広義処置式 “把”+N1+V+N2	甲：古代の“以”字句から発展した処置式 (1)処置“給”+N2 (2)処置“作”+N2 (3)処置“到”+N2		処置義の“把”構文
(二) 狭義処置式 “把”+N+X+V+Y+(N)	乙：受事主語句から発展した処置式 <sup>11</sup>	A+“使得”+B+C	致使義の“把”構文 “把”+「受事主語」+Vp 例：“把畫掛在牆上”
	丙：連動式から発展した処置式		処置義の“把”構文 “把”+N+V 例：“把歌唱・把樹搖”
(三) 致使義処置式 (致使義の“把、將”構文をさす)	この点については論じられていない	A+“使得”+B+C	致使義の“把”構文 “把”+「施事主語」+Vp 例：“把鳳丫頭病了”

#### 4. 処置義と致使義の区分

『兒女英雄伝』の用例には、いずれの意義に解すべきかコンテキストによっても判断の難しいものが見られ、分類に窮するものがあつた。歴史的にみれば、致使義は、やはり処置義からの発展と考えられ、分類上、完全に分離することは不可能であり、更に、『兒女英雄伝』は、未だ現代漢語への“把”の虚化への移行・発展の経過段階にあるため、一層区分が明晰にならない部分がある。邢（2004,pp.142-145）も、次のように述べている。「“把”構文は、処置を表すことから致使を表すまでに、ひとつの階層があり、つまりこれは、処置→処置と致使→致使というものである。“把”構文は、処置義でもあり、致使義でもあるとき“把”構文の構造は異なる角度から分析される。（中略）“把”構文の構造は、一定のコンテキストにおいて、様々に変化することもありえる。（中略）“把”構文の語義特徴を分析する際、“把”構文のあらゆる現象を分析しなければならない、『以偏概全』ではいけない。つまり、“把”構文は、二重の語法意義を表すものであるが、この二種類の意義は相通ずるもので、主語が“把”の受介成分に対して作用と影響を及ぼすことを表している。」本稿では、極力、構文形式と、構成成分の機能、語義の関係において、整合性を追求し分類を進めたが、発展の移行途中にあると思われるものや、コンテキストからも有意識、無意識の意図が判断しきれないものなどが少なからず見られた。

## 5. まとめ

本来、“把”は動詞であるが、いわゆる文法化（虚化）の発展によって、その構文の構造と機能義にも変化が生じた。“把”のこうした変化は、唐代の初期から中期にかけて、七から八世紀に起こり始めた。文法化が始まって長い時間を経た“把”であるが、清代から現代に至る過程でも機能義などに更なる変化が起こりつつある。

結果として、漢語史上、『兒女英雄伝』の“把”構文は、内部構造が複雑で、特殊な用法が含まれていることが明らかとなった。これは、近代から現代に向けて、漢語の補語が複雑化したことにも関係がある。基本的な機能義の面では、動作の結果の生じるプロセスに注目して機能義を捉え、「一種の主体性のある動作によって得られた結果を表す」処置義と、「因果関係によって生じた結果を表す」致使義という観点から“把”構文の機能意義を分類した。全体を通しては、本来、処置義を中心に発展してきた“把”構文が、『兒女英雄伝』の時代においては、その発展の方向が致使義を示す用例に傾きつつあることが判明した。この趨勢は、現代漢語に向かって更に拡大していく傾向が見られる。また、この他に、工具義を表す“把”や“給”義を持つ“把”の存在も確認されたが、このような機能義は、現代漢語には継承されていない。つまり、“把”構文においては、機能義の種類は縮小し、一部の機能義が勢力を拡大していることになる。また、その他に、早期の特徴を備えたもの、状語、賓語、述語が極めて複雑で長いもの、動詞の省略されたものなど、特殊な“把”構文の存在も認められたが、この点については別稿に譲るものとする。

### 付記：

本稿におけるインフォーマントの言語環境は、次のとおりである。

①生年：1974年生まれ、原籍：北京市。学歴：大学院修士課程修了。

言語環境：1974年—1996年北京市。1996年—日本。

②生年：1978年生まれ、原籍：北京市。学歴：大学院博士課程修了。

言語環境：1978年—2000年北京市。2000年—日本。

### 使用版本：

『兒女英雄伝』、光緒4年刊本聚珍堂書房木活字本、『古本小説集成』、収録影印版（山東大学図書館蔵）

### 参考文献：

- 貝羅貝 1999. 早期“把”字句中幾個問題,『近代漢語研究(二)』,pp.146-160, 商務印書館  
胡文沢 2005. 也談“把”字句的語法意義,『語言研究』,2期, pp.21-28  
蔣紹愚 1994.『近代漢語研究概況』,北京大学出版社  
—— 1997.「把構文略論—兼論機能擴展」,『中國語文』,第4期, 中国社会科学出版社  
蔣紹愚・曹広順主編 2005.『近代漢語語法史』,商務印書館

- 盧英順 2000. 「第二回全国現代漢語配価語法検討会」 総述, 『漢語学習』 第2期, pp.16-18
- 馬貝加 2002. 『近代漢語介詞』, 中華書局
- 馬慶株 1988. 自主動詞と非自主動詞, 『中国語言学报』, 第3期, pp.157-180
- 梅祖麟 2000. 『梅祖麟語言学論集』, 商務印書館 (引用論文はpp.188-221に収録された1990年『唐宋処置式的来源』を使用)
- 日本認知科学学会編 2002. 『認知科学辞典』, 共立出版
- 沈家煊 2002. 如何処置“処置式” — 論把字句の主観性, 『中国語文』, 第5期, pp.387-399
- 王紅旗 2003. “把”字句の意義究竟是什麼, 『語法研究』, 第2期, pp.35-40
- 吳福祥 1996. 『敦煌變文語法研究』, 岳麓書社
- 2003. 再論処置式的来源, 『語言研究』, 第3期, pp.1-14
- 邢福義 劉培玉 曾常年 朱斌 2004. 『漢語句法機制驗察』, 三聯書店
- 薛鳳生 (Frank F-S Hsueh) 1994. “把”字句和“被”字句の結構意義—真的表示“処置”和“被動”, 『効能主義与漢語語法』, 北京語言学院出版社, pp.34-59
- 張美蘭 2001. 『近代漢語語言研究』, 天津教育出版社

注)

---

<sup>1</sup>機能義については、語法意義と称する研究もあるが、ここでは“把”構文が持つ機能的な意義という意味で用いている。また、盧 (2000, pp.16-18) に「第二次全国現代漢語配価語法検討会」におけるメインテーマ“从配价语法的角度探讨现代汉语的把字句”に関する代表的な研究者の論述の観点と分析における理論がまとめられている。(郭銳、袁毓林はこれに拠る。)

<sup>2</sup>例文は抜粋にとどめる。

<sup>3</sup>邢 (2004, pp.142-145) は、この二つの機能義の関係について、次のように解釈する。「処置と致使は、主体が一定の方式で客体に対し、作用を発生させることを要求するが、二者は次の点において異なる。一つは、処置は客体の変化を引き起こす場合と起こさない場合の両方があるが、致使は必ず客体の変化を引き起こす。更に、処置とは、主体的有意識で目的のある行為であるが、致使とは、主体が有意識で目的のある行動でも、主体が無意識で目的の無い行動でもどちらでもよいのである。特に注意すべきことは、実際の言語の運用において、処置と致使は、また相互不干渉の語言範疇ではないということである。」

<sup>4</sup>結果目的語：他動詞の目的補語で、その動詞の結果を示すものをいう。たとえば、Il écrit une letter. 「彼は手紙を書いている」において、letterはil écritの結果目的語であるが、Il lit une letter. 「彼は手紙を読んでいる」において、letterは普通の目的補語である。(解説と用例は『言語学用語辞典』 p.104による)

<sup>5</sup>かつては、“把”構文の機能は処置文という概念で考えられていた。しかし“把”構文の語法意義の特性に対しては、現在、分類方法に様々な相違がある。

近代漢語における“把”構文の機能義  
—『兒女英雄伝』からのアプローチ—

たとえば、邢（2004,pp.139）では、“把”構文の意義の特徴として、「(一) 処置説、(二) 致果説、(三) 致使説、(四) 処置・使役説」等があること紹介している。邢氏自身は、同書の中で“把”構文の語法意義に対して、処置と致使の二種類に帰結すべきであるとしており、これは大半の学者と同様の考え方である。そもそも致使とは、「…の結果になる、…することになる」（『中日辞典』小学館）という意味で、ある原因に対する結果を述べるが、研究者が指すところの「致使義」の解釈とアプローチの仕方は様々で、未だ確固たる固定的な定義がないように見える。以下、具体的にいくつかの論旨を挙げておく。

薛鳳生（Frank F-S Hsueh）（1989）は、“把”構文の意義としての「処置」に対して根本的に否定しており、特に次のような例は、「処置」という定義では解釈できないものであると主張している。

例：他把黑板（上）写满了字。

他们把花生全吃了。

你可把我想死了！

那班学生把王老师教惨啦！

那些衣服把她洗得直不起腰来。

そして、“把”構文の意義特徴を次のように定義づける。文法構造：「A把B+C」において、語義解釈：AとBは名詞性成分、Cはいわゆる描写性の説明である。つまり、「Aの関係に因って、BがCの描写する状態に変わる。（AはどのようにBを処置したかではない）」とした。

郭銳の『把字句的配価結構』も、“把”字句は「致使」義を表すとしている。「致使シーン」の概念を用い、分化型と総合型の二種類の致使性の存在を指摘している。「処置」はひとつの特殊な「致使」であり、一種の有意識性による力が関与している「致使」であるとする。これらの処置式とは見なせない“把”構文は、制御可能な動作がないために、被致使者に対して、影響を及ぼすものであるという。

また、胡（2005）も、“把”構文は現代漢語の中で一種の致使形式と見ている。“A把B+C”の語法上の意味は、「致使」の根源であるAに関係があり、“把”構文の賓語は、Cが描写する致使の結果の状態にある。（原文：“与致使源A有关，‘把’字宾语处于C描写的致使结果状态中”）とみなしている。このように、「致使義」を「結果義」と捉えると、「処置義」にも処置によって生じた結果が含意されるため、“把”構文における「結果義」には、「処置」という語義解釈が包括されることになってしまうのである。

それに対し、王紅旗『把字句的意義究竟是什麼』は、「処置」と「致使」の含意について分析し、「致使」が持つ性質は、「処置」に全て備わっているものと考え、更に「処置」には「致使」にない性質があるとしている。“把”構文の構成、変遷、出現する言語環境の三つの角度から、“把”構文の意義は、「処置」義を表すものであると結論付ける。

一方で、袁毓林『述結式的配価結構和把字句的語義類型』は、“把”構文の意義の全てが「処置」に包括されるという考え方を取っている。「積極的処置式（予期した目標

を実現する)」、「消極的処置(予期した目標を逸脱する)」、「反身処置(身体部位に悪しき影響が及ぶもの)」、「被動的被処置=受身の被処置」に分類されるという。

現代漢語においては、このように、いずれか一方の機能義に全て包括されるとする見方もあるが、本稿では、“把”構文の歴史的経緯を考慮し処置義と致使義に分類している。

<sup>6</sup>ただし、『儿女英雄伝』における“把”構文の「致使義」には、この薛(1994)の定義で解釈可能なものと、その定義から外れているものの両方があると考えられる。たとえば、次の例である。

例：那鄧九公聽了，把手一拍，便對着眾人道：“我說你們這班孩子，紫嘴子，一抹汗兒不中用！”(15)

(その鄧九公はこの話を聞くと、ポン手を叩いて、周囲の者に言いました。「これだから、お前たちは、くちばしの黄色い、役立たずだというのだ！」)

この例は、鄧九公が、前段階での安学海の話の聞いて合点が行きその結果、思わず手を叩く場面であることから、処置義とは考え難い。しかし、薛(1994)のいう「A把B+C：“由於A的關係，B變成C描述的狀態”」の定義に対しては、Bが“手”で、Cが“一拍”という瞬間の動作であることから、幾分この定義の表現にそぐわないところがある。そこで、本稿では、以下致使義の定義に対して、「Nに影響(刺激、外圧)を与える力を持ったものが、NがVpする行為(状態)を引き起こさせる」という解釈をした。

<sup>7</sup>“叫‘老爷子’叫得如流水”の意味である。

<sup>8</sup>歴史的変遷に関する研究に対しては、既に蔣(1994,pp.202-221)や張(2001,pp.187-193頁)に先行研究の総括がある。

<sup>9</sup>呉(1996,pp.417-433)において、「『敦煌變文』に以下の(一)から(三)の三種類が見られる」とし、現代漢語にも同様の分類を与える。

<sup>10</sup>梅(2000,pp.188-221)における「唐宋時代の処置式」に基づく分類である。

<sup>11</sup>この分類に関しては、蔣(2005,pp.217-218)は漢語の歴史的発展から鑑みて、「『全唐詩』において、動詞の前に状況語、動詞の後に賓語をとる処置式の“把”構文は8世紀の後半から9世紀の前半に出現し、処置式の“把”構文に複雑な形が出現したのは、簡単な形式よりも更に後のことである」としている。